

# 徳島大学における留学生の就職支援プログラム —アジア人財資金構想事業—

大石寧子・遠藤かおり・石田愛  
徳島大学国際センター

徳島大学は、この春より「アジア人財資金構想高度実践留学生事業」に参加し、本コースの共通カリキュラムを元に授業を展開している。しかし従来のクラスとは異なり、本コースは参加学生の日本語能力差をはじめ専門分野や学年の違い等いろいろな問題が存在している。そこで徳島大学では、これらの「違い」を埋めるべく、いくつかのアプローチを試みている。この1年を振り返り、これらを検証したい。

キーワード：アジア人財資金構想、共通カリキュラム、ニュース解説、優先順位、学生による運営

## 1. 「アジア人財資金構想」事業

### 1.1 概要

アジアの相互理解と経済連携の促進に向けて、経済産業省と文部科学省は、「アジア人財資金構想」事業を平成19年度より推進し、全国を9地域に分け、それぞれの形態でコンソーシアムを形成した。優秀なアジアからの留学生の就職を支援するこのプログラムは①ビジネス日本語②日本ビジネス教育③インターンシップを柱とした2年間のコースである。

応募条件の主なものは、①コース開始時に学部3年、修士1年、博士2年に在学し、2年間本コースで学習可能であること②日本語能力試験2級以上(学部生は1級)かそれに準ずる能力③日本企業・日系企業への就職意思がある者④国費外国人留学生奨学金、私費外国人留学生学習奨励費またはそれに準ずる奨学金の給付を受けていること等がある。これらの条件を満たした者で、大学での審査を経て、最終的に経済産業省で決定される。

### 1.2 四国コンソーシアムの場合

アジア人財資金構想事業は、①高度専門留学生育成事業と②高度実践留学生育成事業に分かれる。前者①は、海外から新たに留学生をリクルートし、国費奨学金を支給し、企業ニーズに合致した各大学が掲げた特別プログラムの中で、2年間学習し就職へとつなげる。

後者②は、既に日本の大学及び大学院に在籍し、各自の専門の元に学業を進めている学生の中で日本での就職意思を有する学生に対して、就活に対する教育を提供し就職へとつなげる。

四国コンソーシアムでは、四国生産性本部が管理法人となり、平成19年度より後者②の「高

度実践留学生教育事業」のもと各地域全て大学が請け負っている。徳島大学は、1年遅れて平成20年度よりこれに参加することとなった。

## 2. 授業への取り組み

### 2.1 参加学生

今期より参加した本学は、準備に十分な時間がとれぬまま情宣を行ったが、予想外に問い合わせがあり、留学生に関心のあることがわかった。また医学部歯学部の学生からも問い合わせがあり、修士2年、博士3年も対象となりうるということがわかった。今期の参加者は以下の5名となった。

	身分	出身		専門分野	日本語能力
1	博士	中国	女	理系	1級
2	博士	中国	男	理系	2級程度
3	博士	台湾	男	理系	2級程度
4	修士	中国	女	文系	2級
5	修士	中国	男	文系	2級

また学部生からの問い合わせもあったが、いずれも授業との調整が難しく、初年度は大学院生のための参加となった。

### 2.2 指針となるもの

初年度となる今期、本学は学生の専門・日本語能力等を踏まえて、無理がなく、しかし効率よくできるよう以下のように指針を立てた。

- ① 研究・勉強とのバランスを考慮し、前後期、週3日で3コマとする。
- ② 本プログラムの「共通カリキュラム」に優先順位をつける。
- ③ クラスは、日本社会の1つとする。
- ④ 可能な限り学生主体の運営とする。

- ⑤ 知識だけでなく実感させる。  
⑥ 地域・学生サポーターの活用

## 2.3 「共通カリキュラム」の取り組み方

初年度の夏にインターンシップを行い、1年目に内定までこぎつけることを全体の目標としたとき、初年度のビジネス教育のメインを「社会人基礎力」を付けることとし、ビジネス日本語の「共通カリキュラム」のテーマとリンクさせて行うこととした。従って本学では、学外からの講師のほかは、日本語教員がビジネス教育の運営や授業を行うこととした。ビジネス日本語の「共通カリキュラム」は次のようである。

フェーズ		テーマ / タイトル	レベル
A 就職活動を知る、自己を知る～就職に向けて～	1	就活へ！はじめの一步	日本語能力試験 2級相当～
	2	業界・企業研究入門～会社選びの第一歩	
	3	つかめ！面接のコツ	
B 日本と自国の違いを知る	4	キャリアプラン	1級相当
	5	インターンシップハンドブック	
	6	知的財産権プロジェクト	
	7	仕事と家族	
C 企業・社会を知る	8	自立支援による地域振興	1級相当
	9	男女共同参画社会の推進	
	10	持続可能な地域おこしイベント、エコツアーの企画	
	11	東アジア進出企業の海外戦略	
D 仕事を知る～企業活動シミュレーション～	12	自国を売り込むツアー企画プロジェクト（旅行観光業）	1級相当
	13	団塊世代向け商品企画プロジェクト（貿易業）	
	14	環境にやさしい製品開発プロジェクト（製造業）	
	15	コンビニ新規店舗企画プロジェクト（流通業）	

初年度は、A群のNo.1, 2, 3とB群のNo.5に絞り、他にクラスの弱い点を補うようなものを取り込み、あわせて行った。

「共通カリキュラム」は、扱うテーマもその中での学習項目も優先順位をつけて行う。例えば、A群1の場合、学習項目を最小限にし、テーマに合わせ、本学就職支援室による就職ガイダンス、徳島の企業の人事担当者や先輩に聞くなどをビジネス教育として日本語教育に取り込み、この際の交渉・運営・出迎え・お見送り、講義の進行等全て学生に任せ、必要時に指導を行ったり、振り返り時に皆で検討しようというやり方で行った。この流れの中で、敬語を含む待遇表現・マナー、メールの書き方をはじめ講義を受けるだけでは得られない色々なものが

実感として得られたと思われる。

## 2.4 当番制と学生による運営

このコースは、就職に向かってより具体的に身につけ、受身ではなく自分たちで自主的に行って実感を得るためにまず当番制を設けた。当番は自分達のポートフォリオの出し入れやその日の授業が円滑に行くよう気を配る。また上記で述べたように外部講師や地域サポーターとの授業や振り返りの時間等は、全て学生が運営を行う。

## 3. 徳島大学としての特徴ある授業

コース開始時、日本語のレベル差や日本人なら当然知っていることが思ったより不十分なことに気がついた。また効率よく日本語の復習や語彙を増やすことも考慮した。そのために、①「ニュース解説」②「語彙クイズ」を取り込むこととした。

### 3.1 「ニュース解説」

以下のことを目的とした。

- ①現在の日本における最新のニュース、又は話題になっていることに触れ新聞(ニュース)に興味を持つ。
- ②日本人と共にビジネスをする上で最低必要と思われる共通したトピックを幅広い知識として持つ。
- ③仕事を離れた場でのコミュニケーションで話題にのれ、話題の提供ができる。
- ④現在の日本の社会の流れに意識をおくことで、日本人の働き方、ものの考え方を理解する。

#### 3.1.1 日本語教育からの焦点

以下のこととした。

- ①要約ができる。
- ②ビジネスに関するキーワードを増やせる。
- ③会議での発表等のしかたを身につける。
- ④発音矯正ができる。

#### 3.1.2 実施状況

毎回授業のはじめに当番制により一人が発表する形を取った。選ぶトピックはどの分野からでもよいが、できる限りその日国民の間で注目されるものとした。その根拠として、それはその日の話題に上りやすく、職場でも大いに役立つと考えられるからである。発表者はただニュースを伝えるのみではなく、聞き手を意識した発表を要求される。つまり単なるクラスでの

学生の発表という捕らえ方ではなく、企業での現状説明や市場調査報告といった場を想定したものである。

### 3.1.3 成果

- ・発表する際の流れがつかめた。

前置き→ニュースの源→要約→選んだ理由

- ・ニュースは政治・経済をはじめ社会面、三面記事にまでわたるため、毎回さまざまなニュースに触れることで時間をかけて日本の社会の概観を感じることができた。しかし、日本社会や日本人に対して、自分が日本で過ごした時間の中だけでの固定的な見方があることにも気づいた。

- ・そのニュースを元にして周辺の語彙や関連項目について考える機会を得ることができた。

- ・皆でニュースを共有することで毎回短い時間ではあるが議論をすることができた。

この一連の活動を通して得られたものは、学生のみならず、教師側にとっても大いにあり、学習者の中の不十分な点や指導の必要な点を見出すことにつながり、その後のフォローとしての補講等の調整を行うことができた。

### 3.1.4 問題点とその考察

発表の際の流れの手順を踏んでいないためにまとまりがなく、何がニュースなのかと聞き手にとってはかなり混乱を起こすケースが当初しばしば見られた。これらの活動の中でとりわけ、気になったのは発音とイントネーションの悪さである。漢字の読み間違いもかなりあった。これらは、日常教師や学生間でのやり取りではあまり問題ないが、職場での電話連絡や調査報告をはじめとする伝達場に支障が生じる恐れがあることがわかった。しかも、情報を持っているのは本人のみであるため、何が何でも正確に伝える必要がある。従ってこの訓練は就職後の職場を想定した効果的な方法と考えた。

次に、ニュースの記事をそのまま持ち込み、(抜粋しながらではあるが)読み上げるケースがあった。あるいは、そのままの文章をメモして抜き出して来るケースもあった。そのため、書き言葉と話し言葉との違いで意味が伝わりにくくなったり、誤解を招いたりしたケースが見られた。母語話者ならおそらく起こりえないであろうが、発音の未熟さと間違ったイントネーションによるものである。また、記事によく使用されている独特の表現をそのまま使用してしまっているため、非常に聞きにくいものと

なった。そこで記事をまず理解し、自分のものにした上で、聞き手を意識した言葉選びを行うという指導が施された。常に相手との関係を重視するビジネスの心得につながる素地作りになるものと考えた。

回を重ねるごとにそれぞれ学生もコツを会得し上達が見られた。また、この取り組みから必要性が感じられた文法の曖昧さや発音矯正に対しての時間を別途設けることへつながることができた。

### 3.2 「語彙クイズ」

新出語彙の導入にとどまらず、授業で扱った語彙の理解と定着をさせ、使用語彙を増やす。また参加学生が中国語圏ということからカタカナ語に対しても多く注意を払うこととする。

#### 3.2.1 実施状況

毎回3問ずつのクイズとした。提出される語彙は漢字とカタカナ語を含むもので基本的に前回の授業中に提出された語彙全てが対象になる。それはテキストのみならず、ニュース解説やその時のクラス活動全般にわたるが、クラス内で何らかの形で解説、説明がなされているものである。学生はその時にメモをするなり、知識を確認するなりで、記憶にとどめているはずであるが、それは各学生によって認識度が違うので学生任せとなる。従って更に確実なものにするため期末にまとめとしてそれまでの中から抜粋してテストも行った。対象語彙が漢字の場合は読み方とその意味、対象語彙がカタカナの場合は意味のみとした。その意味は、辞書にあるような定義にとどまらせず、それが使用された状況を理解した上で、ある程度具体性を持って書かせた。

#### 3.2.2 成果

新聞、ニュースなどでよく耳にする繰り返し出てくるカタカナ語の知識が増えた。

中国語と日本語の表記が同じであっても意味の違うもの、使い方が異なるものの再確認になった。また、使い間違い、覚え違いに気づくことができた。読めていると思っていた漢字の間違いに気づき、訂正することができた。

#### 3.2.3 問題点とその考察

毎回3問ずつであるが、その日のクラスで登場した語彙全てが対象となる。いろいろなジャンルの様々な語彙に触れ、気づかせて、不十分な点を補うことは限られたカリキュラムの中

では効果的であるだろう。しかし、時によっては、テキストの盛り沢山の授業内容をこなすのが精一杯のときがあったり、聞き流しているだけであったりと自分の不足な点を埋めようとする姿勢が少なくなってしまうときも見られた。やる気の持続の困難な点であるといえよう。

取り組み方としては、ときどき過去に提出した語彙を繰り返し提出してみると全く書けないケースも見られ、最重要と思われる語彙は数回にわたって繰り返し提出して、定着させることも必要であった。

中には「語彙クイズ」という形にとらわれすぎることから、辞書的な解答にこだわりそれが使われている背景を考慮できない者がいた。例えば、「推察力」という語彙の意味を「推察する力」としか書けないようなケースである。辞書に書いてあるとおりでも、実情に即した答え方でなければ受け付けられないといったスタンスを通した。あくまで正しく理解し使用できているかどうかの確認と定着を図るのが目的であるため、テストとはせずクイズとし、一言一句にこだわるものではないとした。そこが学生としての単なる知識習得との違いと捕らえ、クラスでは彼らの立場を学生ではなく現場で活躍する社会人として全ての活動を作り上げていった。きちんと毎回おさえていくものは蓄積ができ、個々の活動にも活かされるようになったことが顕著になった。そうでないものは単なる「テスト」の範疇で止まってしまうその後のアウトプットへとつながっていないようである。

### 3.3 教師の役割と要求される日本語力

ここでのニュース解説・語彙クイズとは、共に「共通カリキュラム」の与えられたものを学ぶという授業とは異なった性質を持ったものである。そのことを十分理解させた上で行わなければ、従来のクラス活動と何ら変わりなくそれなりの結果しか出ないものであることは言うまでもない。テキストとは違う、外の世界とつながっている生の素材であり、扱う教師にとっても常に幅広くアンテナを張っていない点には正直大変な面があるのは否めない。が、場合によっては学生の得意分野であることもあるので教師もそのときは一人の社会人としていかにその力を引き出させるかに徹するという姿勢も必要であろうと思われる。

また「共通カリキュラム」をこなすには一級もしくは二級以上の日本語力を要するとされているが、進めるに当たり、相当高度な日本語

力が要求されていることに気づかされた。一年目は就活、インターンシップ、面接時の日本語教育に焦点を当てて行ったが、自分を売り込むための基礎となる語学力が未熟であるがゆえに誤解を招いたり、学生のセールスポイントをアピールするに十分な日本語力を備えていない点で大きな壁となった。また、お国柄の違いによるPRする視点の相違、企業に対する思いや、企業と自分とを結び付ける思考のずれから、エントリーシートを書く段階ですでに大きな問題もあることがわかった。基礎となる日本語に関しては、日本語能力試験対策及び補講の時間を設けることで対処し、全員に語学力の向上を期待した。

## 4. 日本語力向上への対応

### 4.1 日本語能力試験対策

アジア人財資金構想の応募条件に、「日本語能力試験 2 級以上（学部生は 1 級）かそれに準ずる能力」という項目がある。今期の参加者はこの条件を満たしていた。ただ、条件は満たしていても、1、2 級の資格を取得していないため、本プログラムに入ったあとに、日本語能力試験を受験する学習者がいた。

また、本プログラムの「共通カリキュラム」における授業において、面接練習や履歴書の書き方など就職に関する学習項目を扱う中で、知識を得ることの大切さと共に、日本語能力そのものを向上させる必要性を感じた。

このような背景の下、各自の能力にあわせて日本語能力試験 1 級対策、2 級対策クラスを開講し、それぞれ行った。概要は以下のとおりである。

対象	回数	参加人数
1 級	全 10 回（90 分／回）	3 名
2 級	全 15 回（90 分／回）	3 名

\*2 つのクラスを受講したもの 1 名

#### 4.1.1 学習項目と使用教材

次に日本語能力試験 1、2 級対策として扱った学習項目と使用教材について述べる。1、2 級ともに、限られた時間で、より効果的な対策授業をするため、日本語能力試験で出題されやすい重要な文法項目から優先的に扱った。使用教材、および参考文献は以下のとおりである。

対象	使用テキスト・参考文献
1 級	『日本語能力試験に出る文法 1 級』 (国書刊行会) 『完全マスター1 級日本語能力試験 文法問題対策』 (スリーエーネットワーク)
2 級	『日本語能力試験に出る文法 2 級』 (国書刊行会) 『完全マスター2 級日本語能力試験 文法問題対策』 (スリーエーネットワーク)

使用テキスト、参考文献をもとに、1 級は 52 文型、2 級は 99 文型を学習項目とした。

#### 4.1.2 授業の流れ

1 級対策、2 級対策の授業において、基本的には各回、8 文型を対象にし、適宜復習を取り入れながら進めていった。授業の流れとしては、以下のとおりである。

- (1) 文型の接続と意味を理解する。
- (2) 例文から、意味や使われる場面、状況を確認する。
- (3) 例文を作成する。
- (4) 応答練習、会話練習を行う。
- (5) 復習問題で理解を深める。

上記の(3)例文作成や、(4)会話練習では、本プログラムの目的を加味し、就職に関連した語彙や表現を取り入れるように配慮した。例えば、「～次第」という 2 級文法を練習する際には、「コピーが終わり次第、会議室へお持ちします。」「〇〇はただいま外出しております。戻り次第、連絡させます」という表現を取り入れるようにするなど、アジア人財資金構想の授業と連携して使える表現を取り入れるように心がけた。

#### 4.2 日本語補講

このように対応を重ねてもまだ日本語力の向上が見られない学生に対し、11 月末よりアジア人財に係わっている教員以外のセンター専任教員の協力を得て週 1 回 1 コマの授業が提供されている。主に文法の復習、発音指導を軸とし上記の日本語能力が不十分とされている学生の他に自発的に参加したい学生は自由に参加できるとし、現在 3 名で行っている。使用教材は、「初級から中級への日本語ドリル語彙」Japan Times「初級から中級への日本語ドリル文法」Japan Times「コミュニケーションのための日本語発音レッスン」スリーエーネットワークで 2 月まで全 10 回実施予定である。

#### 4.3 BJT 対策

本プログラムでは、BJT 試験（ビジネス日本語能力テスト）が 2 年間のうちに 3 回義務付けられている。本プログラム開講時、1 年目終了時、2 年目終了時である。開講時に実施してみて、試験のやり方に学生の戸惑いがみられ、実力が発揮できなかった感がみられたので、2 回目の前に約 1 ヶ月の対策期間を設けることとした。試験実施がこれからのため、本稿に間に合わないの、この効果については次回の検討としたい。

#### 5 今後の課題

課題として①学生間に見られる日本語力差への対応②2 年目のカリキュラムの運営③キャリアコーディネーターとの連携があげられる。①に関しては、既に補講を始めているので今しばらく様子を見たいと思う。②の 2 年目のカリキュラムであるが、当初の共通カリキュラムの特徴とされていた PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング）の取り込みを考慮しているが、内定を得た後で、しかも論文の大詰めの時期に 1 年目と同様な時間配分が望めるのであろうか。③に関しては立ち上げ期である今期は、連携が難しかったが、2 年目になり余裕もできたと思え、連携の可能性に期待する。そして 3 年目以降の自立を踏まえ、連携して自立のプログラム作りを行いたいと思う。しかしもう一つの大きな課題として就職に関し、徳島に学生たちの望む職場があり、受入が可能なのであろうか。内定が得られなかった後のモチベーションの維持なども案じられる。動き出したからこそわかる問題点を踏まえ、全体枠、方針、教材の見直しや改訂をしていきたいと考える。

#### 参考文献

- ・植木香他(2005)『完全マスター1 級日本語能力試験文法問題対策』, スリーエーネットワーク
- ・アジア学生文化協会留学生日本語コース編(1997)『完全マスター2 級日本語能力試験文法問題対策』, スリーエーネットワーク
- ・松岡龍美他(1995)『日本語能力試験に出る文法 1 級』, 国書刊行会
- ・松岡龍美他(1995)『日本語能力試験に出る文法 2 級』, 国書刊行会
- ・日経ナビ&就職ガイド編集部(2008)『就職活動ナビゲーション 2009 年度版』, 日経 HR
- ・鮎川二郎他(2006)『学生のためのキャリア形成と就職成功へのステップ』, 実教出版
- ・08 日本語教育学会春季大会での春原憲一郎「産学官民連携による国境をこえた人材育成プロジェクトと日本

語教育」のセッション（予稿集 P221～225）をはじめ様々な視察、シンポジウムより情報提供を受けた。

## 付記

- ・本稿は「日本語教育方法研究会 2008 年 9 月」で発表した内容にその後の内容を加え、大幅に加筆修正したものである。
- ・本稿は、3 を遠藤が、4～4.1.2 を石田が、その他を大石が担当し、執筆した。